

基底生成と移動を形作る諸要因: 探索とコピー形成を中心に (発表者決定済み)

企画者: 宗像 孝 (横浜国立大学)

生成文法理論において、統辞構造の構築を行う際に、統辞体(Syntactic Object, SO)を θ 役割位置に導入する「基底生成」と、別のSOを構造の所定位置に移動させる「移動」の競合というのは、重要な研究課題の一つとなっている。初期の極小主義では(Chomsky 1995, 2000)、移動には「コピー操作」が関与するため、基底生成と移動が競合するときには、そのような「余分なコスト」がかからない基底生成の方が優先されると考えられていた(“Merge over Move”)。したがって、(1)でto不定詞のTP指定部を構築する際、(1b)のように名詞句のa manを移動(Move)させるのではなく、(1a)のように虚辞のthereを基底生成(Merge)する方が優先される。

(1) a. There_i seems *t*_i to be a man in the room.

b. *There seems [a man]_j to be *t*_j in the room.

しかし、その後の極小主義では(Chomsky 2004, 2007, 2008, 2013, 2015)、基底生成(Merge)と移動(Move)はそれぞれ外的併合(External Merge, EM)および内的併合(Internal Merge, IM)として併合(Merge)に統一化され「競合問題」は生じないと考えられるようになった。そして、最近の極小主義では(Chomsky 2021, 2023)、探索(Search)の経済性の観点から、移動(Move/IM)の方が基底生成(Merge/EM)よりも優先されると考えられている。

本ワークショップでは、この基底生成(Merge/EM)と移動(Move/IM)の競合に関して、昨今の生成文法理論を基に、改めて基本概念と関連する項目を多角的な観点から考察し、併合の概念を先鋭化させることを目的とする。

これからの英語教育で期待される論理的思考力の探究とその教育手法: 国内外で行ったアンケートの分析結果からみる提言 (発表者決定済み)

企画者: 花崎美紀 (法政大学)

論理的思考力の伸張は、日本の教育界における喫緊の課題の一つであり、当該能力を伸ばすことは、2014年より、高等学校学習指導要領(外国語編)にも組み込まれている。しかしながら、現行の論理英語の学習は、文法を中心とした表現パターンの定着が重視され、論理的思考力の向上を主眼に置いているとは言い難い。そこで本ワークショップでは、企画メンバーで数年前から行っている国内における論理的思考力と英語力の相関関係についての分析結果を、今年の3月に国外(マレーシア)で行った同じアンケート分析結果と照らし合わせて、論理的思考力を英語科目を通して伸ばすためには何をすべきかについての提言を行いたい。

本ワークショップは以下の3部構成で行う予定である。第1部では、メンバーが国内外で行ってきたアンケートの分析結果を提示し、日本の英語教育において期待される論理的思考力の伸長にはどのような施策が必要であるかの提言を行う。第2部では、その施策の具体例として、メンバーが上梓した大学生向けの英語学習用テキストを使用した実践例を紹介する。第3部では、第1部の提言、第2部での具体的施策の報告をうけて、教育工学・教育心理学・英語教育の面からパネルディスカッションを行い、論理的思考力を伸ばすためにはなにをすべきかについて議論を行いたい。